

第18回 UJNR水産増養殖専門部会 日米合同会議 議事要録

第18回 UJNR水産増養殖専門部会 日米合同会議は1989年9月18日(月)～19日(火)、アメリカ合衆国ワシントン州ポート・ランドロウにおいて開催された。シンポジウムの課題は「水産増養殖における繁殖生理」である。

I. 事務会議

米国側部会長 C. Mahnen と日本側部会長 菅野 尚からそれぞれ開会及び歓迎の挨拶が述べられた後、両国の出席委員及びオブザーバーが紹介された(別紙1、2)。特に、今回の合同会議には UJNR 水産増養殖専門部会の創設に関係し、第1回の日米合同会議(1971年、於東京)に出席して重要な役割を担当した米国側 R. Wildman、日本側 古川 厚、藤谷 超、菅野 尚が出席したことについて、感謝の意が表せられた。

事務会議は日米両部会長の合同座長で進められ、和田浩爾 日本側事務局長と E. Fritz 米国側副部会長代理を合同会議の事務局(モニター)に、書記として和田克彦 日本側事務局員と J. Mitchell 米国側委員を選出した。シンポジウムの司会は、日本側 和田浩爾、和田克彦、米国側 W. Dickhoff、E. Fritz、A. Fox が担当することとした。また、UJNR 水産増養殖専門部会における両部会の各担当責任者を以下の通り確認し、議事日程、シンポジウム議題、現地検討会のスケジュールを異議なく了承した(別紙3)。

	(日本側)	(米国側)
共同研究担当	和田克彦	C. Mahnen
研究者の交流	尾形 博	J. McVey
文献交換	淡路雅彦	B. Drucker
印刷	—	R. Svrjcek

なお、第17回合同会議から採用された参加費の負担のシステムが定着した。

1. 研究者交流

1) 養殖研究所 菅野 尚所長、広瀬慶二部長、小野里 坦室長、浮 永久室長、西海区水産研究所 鬼頭 釣室長、農林水産省農林水産技術会議 松里寿彦調査官、日本栽培漁業協会 須田 明常務等が1989年2月11～16日アメリカ合衆国 ロスアンゼルス市で開かれた Aquaculture '89 に参加し、特別シンポジウム Aquaculture Research and Development : A Japanese Perspective で日本の養殖について各々研究発表を行った。

- 2) 北海道サケ・マスふ化場 帰山雅秀主任研究官は1983年2月 Aquaculture '83 に参加した後、シアトル市で開催されたさけ・ますに関するシンポジウムに出席した。
- 3) 養殖研究所 和田克彦室長は1983年9月～12月まで、ワシントン大学水産学部、ルジャース大学貝類研究所、ハワイ大学ケワロ海洋研究所において、貝類の育種及び発生工学の研究を行う。(第13回 UJNR 合同会議出席)
- 4) 北海道区水産研究所 伊藤 博主任研究官は、1983年9月～10月メインリツ漁業資源研究所、海洋大気庁ミルフォード研究所、南カロライナ州海洋資源研究所を訪問し貝類の増養殖に関する研究を行う。(第13回 UJNR 合同会議出席)
- 5) 海外漁業協力財団 藤谷 超博士及び元水産庁研究所長 古川 厚博士は、1983年9月ワシントン州ポートランドでの第13回 UJNR 会議に出席した。
- 6) NMFS カリフォルニア州ティブロンの加藤 進博士は1983年にヌタウナギに関して日本の水産試験場を訪問し成果を挙げた。

2. 文献の交換

1983年10月以降現在までに、日本側部会より94編の論文とそのリスト及び1983年度漁業白書の英語版10部を送付し、また米国側部会から123編の論文とそのリストが送付されたことを、夫々確認した。

3. 共同研究

1) 国際的な海産養殖魚の病気に関する索引の作成

米国側部会長より、米国の C. J. Sindermann 博士を窓口として米国、ヨーロッパ及び日本との3国間で企画する「海産養殖魚の病気に関する索引」の協同作業要領のドラフトを、来年の第19回日米合同会議に向けて作成したい旨の日本側への協力要請があり、日本側部会もこれを了承した。

2) 新しい共同研究について米国側部会では新たな課題を企画することを考えている。本件については今後日米両国間の十分な協議を重ねながら検討を進めることとなる。

4. 出版物の刊行

米国側部会は第13回(1984)及び第14回(1985)合同会議のプロシーディングを刊行し、各50部を日本側部会に発送済みであり、第15回(1986)、第16回(1987)及び第17回(1988)合同会議のプロシーディングは現在編集中であること等の報告があった。また、新しい編集担当者として指名された R. Svrjcek から、UJNR 水産増養殖専門部会シンポジウム発表論文の作成に関して、NOAA テクニカル・レポート投稿規定が紹介された。原稿を IBM 社の MS-DOS プリントあるいは ASCII フィルムのディスクで日本

側から米国側に送付することについては、日本へ帰国した後その可能性を検討することとした。なお、米国側は日本で通常用いられているディスクがそのまま使用できるかどうかを検討してみることにした。

日本側部会長からは、日本の増養殖に関する研究が NOAA テクニカル・レポートを通じて全世界に広報されることに感謝するとともに、日本国内での UJNR 活動を一層高めるために、現在50部送付されている NOAA テクニカル・レポートの送付数を増部することを要望した。米国側部会はこれを了承し100部を日本側に送付することを約束した。

日本側部会は第17回 UJNR 水産増養殖専門部会 日米合同会議シンポジウム報告集2部を米国側部会に贈呈した。

なお、UJNR 水産増養殖専門部会のシンボルマークの作成が話題となった。

5. その他

- 1) 日本側部会長より、UJNR 水産増養殖専門部会に遠洋水産研究所を正式なメンバーに加えた旨の報告があり、米国側部会はこれを歓迎した。
- 2) 1989年度 UJNR 水産増養殖専門部会メンバー名簿及び第18回日米合同会議出席者名簿を日米両国相互間で交換した（別紙4、5）。
- 3) 米国側委員より日本政府と米国 National Science Foundation との共同プログラムについて、日米間の研究者交流に大きく貢献するとのコメントがあった。藤谷顧問から日本の海外協力事業団の事業概要の紹介があった。また、日米両部会長が編集委員を努めている新しい研究誌“International Journal of Aquaculture and Fisheries Technology”の紹介があった。

6. 第19回合同会議の開催

次期第19回合同会議のシンポジウムの課題は「魚類の疾病」であることを確認した。企画は日米相方で打ち合わせることにし、VES などウイルス感染及び赤潮被害等を含む幅広いもので企画することとした。合同会議の時期は1990年10月～11月頃、開催地は事務会議・メインシンポジウムを伊勢市、サテライトシンポジウムを広島県に予定する。

なお、メインシンポジウムの企画については日本側次期事務局長 広瀬部長と養殖研究所病理部長で行うことになる旨、日本側 菅野部会長（養殖研究所長）より説明があった。

7. 現地検討会

現地検討会議のスケジュールについて A. Fox 委員より説明があった（別紙6）。

8. シンポジウム

メインシンポジウムはポート・ルドロウの国際会議センターにおいて開催された。メインシンポジウムにおいては15編の研究発表があり、研究者が多数参加し、活気あふれる討論が行われた（別紙7）。

今回のシンポジウム及び現地検討会の開催について尽力された関係者各位に、日米両国部会長から謝意が表明された。

於 米国ワシントン州ポート・ルドロウ

1989年9月19日



コンラッド マンケン

米国側部会長



菅野 尚

日本側部会長